

## 第7回 第3次清瀬市民地域福祉活動計画策定委員会概要

### 《会議概略》

日時 平成28年1月25日（月）13時30分～15時40分

場所 清瀬市コミュニティプラザ202室

出席 岩崎雅美 内山勇 大久保由里 小川和夫 小俣みどり 小山利臣 兼田則子  
近藤優美 佐竹治男 田上明 菱沼幹男 丸山安三

欠席 赤川都 木下八重 麦倉稔

事務局 森原弘成 土金百合子 波澄守 星野孝彦 富田千秋  
社会福祉協議会実習生1名

### 1. 開会

社会福祉協議会会長より

事務局 赤川委員長が体調不良により欠席。要綱規定により議事進行は副委員長をお願いしたい。

### 2. 第6回策定委員会の議事録について

★ 資料番号1「第6回清瀬市民地域福祉活動計画策定委員会概要（案）」の議事録内容について事務局より説明

9ページ7行目「意見集約書」→「意見集約票」

5ページ下から7行目「できないと。そういう市民が」→「できないと、そういう市民が」

他、内容に異議なく承認される。

### 3. 計画書素案について

副委員長 事務局より前回案からの修正箇所を中心に資料説明を行い、その後にご意見を伺いたい。

★ 資料番号2、3、4、当日配布資料1に基づき事務局より説明

副委員長 まず、第1章についてご意見いただきたい。

委員 字体がいろいろ使ってあってわかりにくい。小さい字も見づらい。

副委員長 1ページと2ページで同じところで字体が統一できていない所もあるので、整理していただきたい。

委員 2ページ下、(2)多様な“地縁”にそった、と書かれてあるが、この地縁について、知っている人は意味が分かるのかもしれないが、外の人は意味が

分かるのかどうか。この計画はいろいろな人が読むと思うが、外からきて間もない人がこれを読むと、地縁にそったという部分がどういうことを意味しているのか分からず、この清瀬は自治会などの組織に強制的に入られるのではないかというイメージを持ったりするかもしれない。もう少しわかりやすい表現があるとよい。

委員 1 ページ目は福祉教育、2 ページ目からは福祉共育となっている。意味があって共育にしているのに 1 ページ目はなぜ教育なのか。

事務局 最初なので、共育にするか迷った。

副委員長 最初から共育で統一してもよいだろう。

委員 3 ページ目「成果と課題」で、かなり直されている。課題のところ、「できていない」「すすんでいない」という表現を「ネットワーク化」「確保」と表現している。確保することやネットワーク化が進んでいないことが課題、という事をどう表現するのが良いのか。

副委員長 そこは「課題」と「問題」という言葉の違いではないか。改善しなければならない状況にあるというのが「問題がある」という事で、その問題を克服していくための方策が「課題」だと考える。例えば、レポート課題というと、学生が取り組まなければならないものとなる。その観点からすると「課題」でよいのではないか。

委員 成果と課題のページはとてもよくなった。サロンはわかりやすいが、子どもの居場所の立ち上げ支援、共働とあるが、居場所がないと言っている中、子どもの居場所が立ち上がったというのはわかりづらい。また、円卓会議も同様で円卓会議は知られていない。市民が分かりやすいものでないと成果が分かりづらいのではないか。

4 ページ目について、必要な情報が行き届きにくいだけでなく、利用しづらさがあるという事もぜひ追加していただきたい。

副委員長 利用しづらいという点は大事なので追加していただきたい。また、先ほど出てきた「地縁」についてどう表現するか。例えば、「多様な地域のつながりに寄り添った計画にすること」という案が考えられるが、他に良い言葉があれば出していただきたい。

委員 言葉を置き換えるのもよいが、用語集で詳しく説明して、用語集に書いてあるという事が分かるようにしてはどうか。

副委員長 用語解説するのであれば、従来から住んでいた方だけではなく、新しく移ってきたり、ここで働いている方もその地域のつながりとしてとらえていきましょうというようなものが「地縁」だと説明できるとよいのではないか。

3 ページ目について、内容が非常にざっくりとしている。もう少し丁寧に書き込んでいくとわかりやすくなっていくのではないか。

事務局 そこはもう少し説明を加えるなど直していきたい。

副委員長 見出しは「成果」となっているが、中身は内容と効果になっている。どう

いう取り組みに対して、どういう成果があったか、どうつながったかというように、取り組みと成果だけでも良いように思う。効果が入ると混乱してしまう。

委員 円卓会議は市の管轄ではないのか。社協の管轄でもあるのか。

事務局 管轄は市役所になる。社会福祉協議会は、ネットワークの一員として参加している立場になる。地域福祉活動計画の性格として、社協として何か取り組みをしているという視点だけではなく、地域で取り組みや活動が増えていたり、社協がネットワークの一員としてかかわっているというのも大事な視点だと考える。

委員 今のような説明を聞けば理解できる。ただ、このままだと出来上がった計画を見た人は、同じ疑問を持つだろう。読んですぐわかるような表現をしてほしい。

副委員長 見出しが前期計画の成果と課題になっているので、活動計画の成果ととらえられてしまう恐れもある。例えば、円卓会議への支援、円卓会議との協働などといった表記にしてはどうか。基本的に「社協として」というのが大事なのでもう少し工夫してほしい。

委員 2ページ目に、その活動に応じて今後適切なエリア設定をしていくとあるが、5年間で活動が進んでいくと、このエリア設定が変更になっていくという意味なのか。それとも、活動毎にそれに合わせて設定していくという意味なのか。どちらなのかわかりにくい。

事務局 いくつか地域では小学校区域で取り組みが進むかもしれないし、いくつかの自治会が集まって行われるかもしれないし、あるいは中学校区域かもしれない。活動だけではなく地域のつながりに応じて、という表現が入った方が分かりやすいかもしれない。

委員 3ページについて、第2次計画で取り組むとしている目標が4つあって、さらに具体的な項目が50項目ぐらいあるが、円卓会議や子どもの居場所という取り組みは入っていない。第2次計画からのつながりという点からみると、第2次の取り組み対応をここに書いていった方が良いのではないか。

副委員長 指摘のあった通りだと思うので、少し構成しなおしていただきたい。案のような内容を盛り込んでもらっても良い。また、エリア設定について、「今後適切なエリア設定をして、住民活動を支援していく」等追加した方が分かりやすいのではないか。

続いて第2章以降の検討に入っていきたい。用語集は後ろよりも9ページのようにその場にあった方が分かりやすいかもしれない。

委員 訂正していく中で読みやすくなっている。どこかで触れるのかもしれないが、いつからいつまでの計画かというのが最初にあった方が良い。

事務局 いつからいつまでの計画かというのは最後に入っているが整理しなおしたい。

副委員長 表紙に入れたり、あいさつの中でふれるなど最初に入れる方がよい。

委員 5ページ「2. 特に力を入れて取り組むこと（重点目標）」の説明文を、「必ず進めていく必要のある取り組み」とした方が良い。

9 ページで「特に力を入れて取り組むこと」として、「多様な福祉共育の場づくり」とあるが、16 ページに「居場所」という言葉が新しく出てくるが、居場所の考え方について、ずっと最初から言っているが、「学び・交流・体験の場づくり」はいいのかもしれないが、福祉共育の説明文の中では大人も子どもも地域の中で共に生き、共に学びあい、共に育ちあうと書いてある。そういうものはとぎれとぎれの学習の場では育たなくて、一つでも二つでも、その場があることで一緒に集い学ぶ、それこそが地域で学ぶという事ではないのか。この辺の考え方が分かってもらえていない。ピッコロの事務局では、小学生、中学生、高校生、大学生と成長していった子どもを持つ人が多いが、学校の中で教育プログラムをつくるのは限界があるのではないかという意見があった。地域の中で共に生き、共に学びあい、共に育ちあう福祉共育の意味はとてもいいと思うが、「多様な福祉共育の場づくり」というのが何か違うのではないか。

また、地域活動に関わるサポーターについて、サポーターはボランティアという考え方にたっている。ボランティアをレベルアップさせて地域ごとのサポーターを育てるのか、新たにサポーター制度をつくるのか、そしてこのサポーターはボランティアなのかなど考えがあいまいに感じる。最後ともつながるが、困った時にすぐ手を差し伸べてもらいたい、というのはボランティアのサポーターではだめだと思っている。新たな制度ではなく制度をつくらないとそういう困った人を助けることはできないのではないか。重篤な課題を持った人は、地域の助け合いや支え合いがあっても支援はできないと思うし、専門職の相談員がいても支援はできないと思う。

副委員長 今の発言について、専門職の力で支えていくということについて、資料 7、8 ページを見ていただきたい。「受け止めあえる地域」の中で「多様な相談支援の形をつくります」の中に「制度から漏れる要援護者支援に関わる専門職の配置」とあるが、この専門職が要となって、住民同士では支えるのが難しい所をしっかりと支えていったり、「新しい支援の仕組みづくり」に関わって住民の方々と制度をしっかりと支えていく。このあたりを理解してもらえそうな表現にするとうまいのではないか。

委員 13、14 ページに「制度から漏れる要援護者支援に関わる専門職の配置」とあるが、専門職が家事援助や病院に連れて行ってってくれるのか。専門職が個別に対応するわけではないだろう。専門職がいて、その下に、困っている人がいたらすぐに動けるサポーターが必要なのだと思う。そういう流れがこれだとイメージできない。専門職の人がすぐに対応してくれるのではなく、専門職の人と連携しながら身近な地域の人が助けに行くという事を想定しているのではないか。

副委員長 一人ひとりを支える地域のネットワークをいかにつくっていくのかということだろう。ネットワークができるところまでを、専門職が関わって、地域の人たちにつないでいく。地域でできるところは地域でやっていくし、難しい所は専門職につないでいくといった、個々のサポートネットワークをいかに作って

いくのかというのが 14 ページの図では見えにくい。またこの図だと支援を必要としている人の窓口がすべて地域サポーターになってしまっていて、社協や地域相談所になっていない。図の工夫が必要だろう。

ボランティアと地域サポーターの違いについて、構想としては地区ごとの組織を立ち上げていって、組織の活動をしてくれるサポーターを養成していくというイメージがあるが、そういったところも見えにくいので、新しいものをつくっていくように見えてしまうのかもしれない。

委員 9 ページにそれぞれができることを登録してもらい、支援を必要とする人に対する気づきやちょっとしたサポートができるとあるが、同じようなものとして市民活動センターで行っている地域通貨もある。それとの関係はどうか。

事務局 地域通貨ピースは、市民活動センターの活動ではなく、他の団体と同じ位置づけになる。

地域通貨ピースは清瀬全体の互助を目指す市民活動団体。地域通貨ピースの他、既存のふれあい協力員などの地域のボランティアな人の層とも重なる部分が出てくるだろう。そこを具体的にどのようにしていくかというところまで整理できているものではないが、一定の地域ごとに、そういう人たちと共有しながら、助け合いや支え合いが出来るようなサポーターづくりに取り組むことが出来ればと考えている。

委員 5 ページが新しく入ったことと、7, 8 ページはわかりやすくなっている。また、活動計画作りを通して、職員がワーキングチームを開催するなど地域の課題を解決するという姿勢をつくったというのは大きな成果ではないか。様々な意見が出される中で、柱となるのが 9, 10 ページの 3 つの重点目標だろう。一つには福祉共育の場づくりとして、いくつかのコミュニティのような場があってもよいだろうし、長いスパンで継続的に関わる場もあってよいだろう。継続的に関わるには (2) のサポーターづくりが大事となる。これまでは、個別の活動毎の協力員や人材は養成されてきているが、地域単位で、地域の課題の共有から解決までの活動に結び付いていないというのが、今の地域の皆さんの課題である。それを受けて (3) の小地域ごとの福祉推進組織づくりとなり、将来、地区社協となっていけばいい。すべてのものをこの活動計画に盛り込んでいければいいのだろうが、一人ひとりの考えが異なっているのでうまくいかない部分も出てくる。基本的にはこの 3 つを骨子としていければよいのではないか。

18 ページについて、新しい支援サービスづくりを「新しい支援の仕組みづくり」に改めているが、下の図も「支援の仕組みづくり」に改まってよい。専門職が解決した方が望ましいものもあるし、ちょっと気になる人については、専門職ではなくて、身近な地域の人への声掛けが効率的だと思う。そういったところが、制度、サービス、支えあいなどでは対応できない課題。地域ごとで違ってきてもよいし、既存のサービスや制度では解決できないとなれば、社協の協力を得ながら自分の地域で解決していけるように考えて作っていけばよい。皆さんの指摘さ

れている内容と案は全体としてずれているわけではないので、細かい内容の調整でよいのではないかと。

委員 19 ページは重点目標に絞っているのですが、10 ページの後に入ってもよいのではないかと。また、20 ページについて、「⑤運営体制と財源の確保」という項目が新しく追加になっているが、大事な項目。小地域ごとの福祉推進組織づくりのような「地区社協」の取り組みは全都的に進んでいる。専門職だけでは住民一人ひとりを支えることは難しく、地域の中で福祉を推進できるような組織が必要。さらに福祉推進組織を支える職員が必要で、東京では地域福祉コーディネーターやコミュニティソーシャルワーカーとよばれる個別支援から地域支援を進める職員の配置を勧めている。例えば地域福祉コーディネーターのような職員を配置していきたいという事も書き込んでいくとよいのではないかと。

委員 6 ページの写真があると、具体的に社協が頑張っていることがよくわかる。ただ、9 ページの地域サポーターの写真と内容でイメージがずれている。

事務局 指摘のあった写真は、イメージに合う写真に変えていく。

委員 最初、この専門職という概念が分かっていなかったが、コミュニティソーシャルワーカーを考えているのであれば、そうわかるようにした方がよいのではないかと。また14 ページの図だが、支援を必要とする人が地域サポーターの上にあるとわかりやすいのではないかと。また、サポーターとボランティアについて、共通の認識に立てるように設定をきちんとしていくことが必要だろう。

委員 サポーターについては、いろいろな人たちと接する人と理解した。実際の現場では学んだこと以上にいろいろなことがあるので、サポーターを助ける人が必要なのではないかと。また、学んだ子どもが家庭に帰って親と話をしてもかみ合わないというのは困ることなので、親も含めた教育が必要だろう。実際に、障害のある子の保護者や高齢者を介護している人は、周りの人たちからは理解されないで肩身の狭い思いをしている。子どもや高齢者から見た場合は、家族がサポーターだろうし、動きやすいように助けることが必要なのではないかと。福祉推進組織というのは、いろいろな活動をしている人を助ける場所だという事が明確にわかるようにしたらどうか。そういった組織はボランティアというのは厳しいだろうから、社協の組織を編成してほしい。

委員 19 ページは「計画の効果」ではなく、予測なので「予測」と追加するほか、「こんな助け合いが増える」等表現を改めた方がよい。

事務局 改めていく。

委員 認知症サポーターもサポーターであり、人数も増えているので入れてほしい。また、5 ページについて、基本理念や重点目標、基本目標等どれも大事なもののだが、目標という言葉が多く使われているので読む側の理解が難しい。例えば、重点目標は「基本理念の達成に向けて必ず進めていく必要のある施策」などにしてはどうか。

副委員長 重点目標ではなく、重点事業や重点プロジェクトという表現の方がよいので

はないか。

委員 地区社協について、各地域に社協職員が行って相談を受けるのは人件費の問題などからできないという話をきいた。清瀬市は、都内と違って74000人で端から端まで30分で移動ができる。ファミリーサポート事業では、梅園や旭が丘、下宿は支援者が少なく、中里、上清戸、中清戸、元町は支援者が多い。地域の力量の差があるのに、なぜ地域ごとの社協やサポーターにこだわっているのか理解が難しい。小さい清瀬なので地域を超えての支援もあってもよいのではないか。子ども家庭支援センター課では、職員が地区担当を持っているが、1地区ではなくて2から3地区担当している。そういう方向性を考えているかどうか。また、野塩、竹丘、台田、旭が丘、下宿など団地がある地域では、夜ご飯を一緒に食べられないような貧困層が集中している。そういった地域差や重篤な困っている人がいることもわかっているのに、なぜニーズを掘り起こしていくところから始めるのか。見えている課題をどうにかするという計画ができないのか。19ページの福祉共育の場をつくるといっても、学校教育などの取組みしかないというのも残念に思う。

副委員長 府中市の取組みでは、各小学校区くらいでわが支え合い協議会というものを作り、その地域の人がある地域の課題に目を向けて自分たちが行動していくと同時に顔の見える関係性を作っていこうとしている。ニーズ調査も、その地域の住民自身が自分たちの地域の事を把握してもらうかというのが大事で、地域ごとの福祉推進組織が大事になってくる。意見があったように、限定された地域では助け合いの担い手がないので広いエリアで考える必要もある。一方で、自分たちの地域と意識できる住民の感覚もある。本当ならばエリア設定まで計画できれば良かったが、方向性は示していくようになるのではないかな。

また、サポーターについて、小地域活動に関わるサポーターづくりという意味合いだろうから、9ページの「地域のサポーターの現状」はボランティアの現状でも良いのではないかな。名称も「小地域ささえあいサポーター」などでも良いのではないかな。福祉共育の場づくりも、小地域ごとの組織がベースとなって場を作っていくことが大事。見えるように表現してほしい。10ページも、連絡会ではなく、住民が行動する組織を作るといった事が伝わるように工夫してほしい。

また、小地域の福祉推進組織を進めるのを支えていく専門職として、社協の地区担当職員を配置する、といった表現もあるだろう。コミュニティソーシャルワーカー、東社協では地域福祉コーディネーターという名称の職員を各地区に配置をしている。制度から漏れる要援護者を支援する地域福祉コーディネーターを配置するという。福祉推進組織も小地域ごとの支え合い組織づくりとして、それを進めていく支えあいサポーターを養成していきましょうとなる。それがベースとなって、地域で多様な学び場の場を進めていきましょうというのが打ち出せるという。住民活動は様々あるので、地域福祉コーディネーターというのを配置して、地域の支援を期待されながらも個別支援をしていくというのが出せるとよい

のではないかと。事務局で整理してたたき台を作っていただきたい。

委員 構成について 5 ページの基本理念の後に重点目標が出てくるところが分かりにくい。基本理念の後には 4 つの基本目標があって、そのあと、具体的な取組みの中に重点施策が出てくるという流れではないか。5 ページの項目は、1 基本理念、4 基本目標と具体的取組、3 体系図、2 重点目標、5 取組み推進のイメージ図という順番ではないか。

副委員長 それが本来の順番だろう。読む側が読みつかれてしまうとこの計画で何するのというのが分かりにくくなってしまふのではと考え、まず力を入れて取り組むのは何なのかを示して、それから詳細に入っていったという意見をから、こういう順番になったのだと思う。ただ、これは皆さんで作る計画なので、わかりやすく直してもよいと思う。概要版で、重点的に取り組むことをしっかりと打ち出してくればよいだろう。

委員 当日配布資料 12 ページの「社会福祉協議会とは」の図について、社協自体は住民を中心とした協議体組織であるので、社協が真ん中にあるという図は説明文と違うのではないか。

副委員長 これらが輪になっている等、社協と地域住民や様々な機関が協力し合いましたよというところがあるような図にした方がよい。次回までにわかりやすくする。

その他あれば、メールなどで事務局に寄せていただきたい。

委員 7 ページについて、「人を広げる」という表現になっているが、「人の輪を広げる」「コミュニティを広げる」等の表現の方が良い。

副委員長 最終的なご意見に向けて大事なご意見を多くいただけた。

今後の進め方について、事務局より説明いただきたい。

事務局 貴重なご意見をいただきありがとうございました。ご意見を生かし切れていない部分もあるので、もう一度事務局で再構成していきたい。また、概要版を A3 版両面で作成していきたいと考えているので、次回提案したい。目次以前の部分について、提案ではあるが、委員長会長だけでなく、15 名の委員の皆様より一言寄せていただきたいと考えている。次の委員会でご意見をいただきたいと思う。

## 5. 閉会

社会福祉協議会常務理事より